

韓国語の中間構文について - 日本語との対照 -

著者	千 昊載
雑誌名	東北大学言語学論集
号	6
ページ	83-103
発行年	1997-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129579

韓国語の中間構文について

——日本語との対照——

千 昊載

キーワード: 総称性, 含意動作主, 状態相, 相互的含意, 中間受動構文

1. はじめに

中間構文は「動作・作用の結果としての状態変化」の意味をもち、受動的な意味を含んでいるが、その動詞の語形は受動形ではない⁽¹⁾。例えば、次の例文の(1a)は他動詞文であり、それに対応する(1b)は中間構文である。すなわち、(1b)の中間構文の自動詞「切れる」は受動形態素 *-are-* をもたず受動的な意味を含むことから中間動詞とされる。

- (1) a. 太郎がパンを苦もなく切った。
b. このパンが／は苦もなく切れる。

「切る」→「切れる」のような動詞の語形変化と、「パンを」→「パンが」のように「パンが」が主語の位置を占め、対応する他動詞文の動作主「太郎」は統語上に実現しない。日本語の中間動詞は「切る [kir-u]→切れる [kir-e-ru]」のように、五段活用他動詞の語幹に接辞 *-e-* を添加することにより形成されるものがあり、これを J (Japanese) -1 型と呼ぶことにする。この種の自動詞には「焼ける, 売れる, 割れる, 抜ける」などがある。

さらに、日本語の中間動詞には、次のように他動詞を基本にして派生されるものがあり、これを J-2 型と呼ぶ。

- (2) a. 花子が扉を閉める。
b. この扉は簡単に閉まる。

この種の中間動詞は J-1 型にみられる特別な形態素 *-e-* をもたない自動詞である。この種の自動詞として「止まる, 動く, 鳴る」などが挙げられる。これらの形態的特徴をもつ中間動詞は、受動形と可能動詞、そして自発動詞と形態・統語・意味的な類似性が多いが、他の動詞と区別可能な文法特徴をもつ。

本研究では日本語の中間動詞と近似の意味を表わす韓国語の中間動詞を対照して、おののに含まれる文法的特徴を分析することにより、中間構文によって表わされる意味内容が言語によってどのように異なっているかを考察し、韓国語の中間構文の特徴からスペイン語と

(5) K-2 型:

a. John-i ppang-ul calu-n-ta. (他動詞文)

-NOM パン-ACC 切る-NPST-DSE

‘ジョンがパンを切る’

b. I ppang-i/-un cal cal-li-n-ta. (中間構文)

この パン-NOM/-TOP 簡単に 切る-MID-NPST-DSE

‘このパンが／はよく切れる’

(5b) の K-2 型の中間動詞は対応する他動詞から派生したものである。(5b) の -li- という接辞は動詞語幹の音韻的環境によりその添加が決められる異形態 (allomorphy) である。K-2 型の中間動詞 (自動詞) としては次のようなものが挙げられる。

(6) K-2 型の中間動詞:

phal-ta ‘売る’: phal-li-ta ‘売れる’ ilk-ta ‘読む’: ilk-hi-ta ‘読める’

kal-ta ‘研ぐ’: kal-li-ta ‘研げる’ kkakk-ta ‘削る’: kkakk-i-ta ‘削れる’

ssis-ta ‘洗う’: ssis-ki-ta ‘洗える’ sin-ta ‘履く’: sin-ki-ta ‘履ける’

韓国語の中間構文の研究としては Cho (1993) がある。Cho は韓国語の中間構文が英語の中間構文のような状態化の操作を受けないことから、韓国語の中間構文は単なる他動詞文から派生された自動詞文であると論じ、中間構文に対する Kemmer (1988) の普遍的仮説の反証としている。しかし、Cho は一種の自動詞文であるこの構文がほかの別な特徴をもつという可能性を追求していない。

一方、中間動詞に添加される -i-, -hi-, -li-, -ki- などの接辞は自動詞形態素、受動形態素、使役形態素と同じ音声形をもつために、それぞれの類似点と差異点に関する論議が行われている (金 1962, 朴 1978, Kim, Sek Tek 1979, 1987, Kim, Han Kon 1983, Yeon 1991 など)。先行研究の主旨はこれらの接辞が添加された動詞は態 (voice) をもつ前の本動詞 (自動詞) という点で使役と受動と区別され、また韓国語では態の形態素が十分に発達していないために、使役と受動の観察は動詞が主語との呼応なのか目的語との呼応なのかを格別に注意せねばならないと言われている。このように韓国語の中間動詞に添加される接辞は受動形態素、使役形態素、自動詞化形態素として分析されてきたために、中間動詞として働くことにはほとんど注目を受けなかった。もし韓国語の中間動詞が自動詞であるとするすべての自動詞は中間用法をもたなければならない。そして受動であるとするすべての受動文は中間用法をもたなければならない。このことから韓国語でも中間用法しかもたない動詞は存在しないこと、中間用法が派生的に得られる用法であることが知られる。

3. 日本語の中間構文の文法的特徴

この節では日本語の中間構文の文法的特徴に関する包括的な記述と分析を行う。日本語の中間構文の一般的特徴に関する主要な研究としては、川崎 (1971)、寺村 (1982)、中右 (1991)、国広 (1994) などがあるが、これらの研究によって明らかにされた中間構文の諸特徴をまとめると次のようになる。

- (7) a. 中間構文は主語の総称的特性を記述する —— 総称性 (Genericity).
- b. 中間構文には外部動作主が含意される —— 含意動作主 (Implicit agent).
- c. 中間動詞は状態的である —— 状態性 (Stativity).
- d. 中間構文は可能文の特別な場合である —— 様相 (Modality).

以下の節では、先行研究の成果を踏まえて韓国語の中間構文と対照するため、日本語の中間構文のもつ文法的特徴を具体的に述べる。

3.1 総称性 (Genericity)

中間構文は総称的 (generic) であるといわれるが (Keyser & Roeper 1984, Fagan 1988, 中右 1991, 中村 1995 など)、典型的な総称文といくつかの点で異なっている。

- (8) a. 日本人は勤勉である.
- b. いかは海草を食べる.
- (9) a. ねこはよく眠る.
- b. この扉はよく閉まる.
- c. このパンは簡単に切れる.

典型的な総称文は、(8) に示すように、特定の個あるいは集合ではなく、類に含まれる人と事物を一般的に指示する。これに対して、中間構文は (9a) のように不定の主語を指示することも、(9b, c) のように定の主語を指示する場合もある。

中間構文の特性は動詞が主語の特性を記述していること、そしてその特性は一般的、総称的特性であることである (中村 1995: 81)。それでは、この中間動詞がもつ総称性はどのように説明されるのであろうか。まず、一つめは、次節で後述するが、中間構文では意味上不特定多数の動作主が含意されていることである。主語の属性は特定の動作主ではなく不特定多数の動作主の行為によって必然的に発揮されるために、いつも基本的な静的可能性を内包する⁽³⁾。二つめは、不特定多数の動作主の行為内容を表す中間動詞が状態相の解釈を受けることである。3.3 節でみるように、中間動詞は特定の時点の一時的変化よりも一定の不変化を問題とされる。したがって、中間動詞は状態動詞であり、それゆえ総称的解釈を受ける。

最後に、(8) の典型的な総称文の主語は、後置詞「は」に表示されることから (Kuroda 1992)、

(9) の主語の総称的特性に対する恒常的判断を示す中間構文の主語も「は」によって叙述されると考える。すなわち、このことは、日本語の中間構文は、主語がもつ複数の属性の中から個別的属性を静的実体として捉える構文であることの帰結であると考えられる。

3.2 含意動作主 (Implicit Agent)

日本語の中間動詞が主語の総称的特性を記述することを示すいくつかの事実をみてみよう。中間構文では動作主が統語上生ずることはないが、動作主は明らかに含意される。例えば、次の例文 (10) と (11) の中間構文から、直観的に動作主が含意されていることを感じることができる。

(10) a. この本は簡単に読める。 (J-1 型)

b. このパンは簡単に切れる。

(11) a. この車は簡単に止まる。 (J-2 型)

b. この人形は簡単に動く。

すなわち、例文 (10) と (11) の主語は意志性をもたないために、それらの属性は含意されている動作主の関与によって表される。このことは対応する他動詞文の主語一目的語項が中間構文でも存在している、ということの意味する。

まず、含意動作主の存在は、例えば (12) と (13) のように、不特定多数の代名詞「誰もが」を主語にした可能文に書き直す (paraphrase) ことにより立証できる (可能文については後述する)。

(12) a. だれもがこの本を簡単に読むことができる。

b. だれもがこの肉を簡単に切ることができる。

(13) a. だれもがこの車を簡単に止めることができる。

b. だれもがこの人形を簡単に動かすことができる。

J-1 型と J-2 型の中間構文を可能文に書き直すことができるのは、(12) と (13) の可能文とほぼ同義だからである。すなわち、(12) と (13) の J-1 型と J-2 型の内容である「簡単に止まる」と「簡単に読める」という内容が「だれもが」に当てはまることから、動作主の存在が含意されるといえる。このことは日本語の中間構文が主語の総称的特性を記述することの帰結である。

また、中間構文に含意される動作主の存在は、自動性を表わす「ひとりでに、おのずと」との共起関係を検討することにより立証できる。次の例文をみてみよう。

(14) a. *この本はひとりでに読める。 (J-1 型)

b. *この肉はひとりでに切れる。

(15) a. ?この車はひとりでに止まる。 (J-2 型)

- b. この人形はひとりでに動く.

自動性を表わす「ひとりでに, おのずと」は, 無動作主性 (agentlessness) を表わすものである (Keyser and Roeper 1984: 405). 例文 (15) の J-2 型は自動性を表わす副詞との共起を許すことから, 含意動作主の存在が明確ではないが, (14) の J-1 型には動作主の存在がはっきり含意される.

しかし, 中間構文に動作主が統語上実現することはない. すなわち, 次のように動作主は受動文では随意的に抑制されるのに対し, 中間構文では義務的に抑制される.

- (16) a. 太郎が肉を切る. (他動詞文)
 b. 肉が (太郎によって) 切られた. (受動文)
 c. この肉は (*/?太郎によって) 苦もなく切れる. (中間構文)

3.3 状態性 (Stativity)

中間構文は中間動詞の時間的性質, つまり相 (アスペクト) の性質の帰結としても説明される. このアスペクト性質は中間動詞は特定の時点の一時的变化よりはある一定の不変化を問題にすることを意味する.

Keyser and Roeper (1984) によれば, 英語の中間動詞の状態性は進行相 (progressive), 動作主指向 (agent oriented) の副詞⁽⁴⁾, 疑似分裂文 (pseudoclefts), 単純反復現在時制 (iterative simple present), 目的節 (rationale clauses) などとの共起適否を検討することにより立証できると考えられている. これはそもそも Dowty (1979: 55-56) が状態動詞 (stative verbs) を非状態動詞 (non-stative verbs) から区別するために用いたものである.

- (17) Middles do not occur with the progressive.
 *Chickens are killing easily.
 (18) Middles do not cooccur with agent-oriented adverbs.
 *The book reads carefully.
 (19) Middles do not appear in pseudoclefts.
 *What the chicken did was kill easily.
 (20) Middles do not have the iterative simple present.
 *Bureaucrafts bribe every year at Christmas.
 (21) Middles do not appear in rationale clauses.
 *The book reads well [PRO to store knowledge].

日本語の中間構文では主語の総称的属性が記述されるので, 本質的に状态的 (stative) であり, 非出来事的 (non-eventive) である. それゆえ日本語の中間動詞は状態動詞であり, 総称的解釈しか許されない. では, 日本語の中間動詞が状态的, つまり非出来事を記述することを示す

いくつかの事実をみてみよう。

- (22) *このパンは簡単に切れている。 (J-1 型 + ている)
- (23) *この車は簡単に止まっている。 (J-2 型 + ている)
- (24) *この肉は毎朝 8 時に苦もなく切れる。 (J-1 型 + 単純反復現在時制)
- (25) *この扉は毎日十二時に簡単に閉まる。 (J-2 型 + 単純反復現在時制)

例文 (22) - (25) にみるように J-1 型と J-2 型の間接動詞は状態相の解釈を受けるために、特定の時点を表わす進行相および反復的単純現在時制に生じない。そして次に示すように日本語の間接動詞は擬似分裂文、目的節そして動作主指向の副詞とも共起しない。これらはすべて状態動詞に特徴的なことである。

- (26) *この本がすることは簡単に読めることである。 (擬似分裂文 + J-1 型)
- (27) *このトラックがすることは簡単に動くことである。 (擬似分裂文 + J-2 型)
- (28) *[食事をするために] このパンは苦もなく切れる。 (目的節 + J-1 型)
- (29) *[荷物を運ぶために] このトラックは簡単に動く。 (目的節 + J-2 型)
- (30) *この本は一生懸命に読める。 (動作主指向の副詞 + J-1 型)
- (31) *このトラックは慎重に動く。 (動作主指向の副詞 + J-2 型)

3.4 様相 (Modality)

中間構文の最後の特徴は、中間構文が可能文の特別な場合として説明されるということである。日本語の中間構文は次の (32b) と (33b) のように、可能文に書き直すことができる。

- (32) a. このパンは簡単に切れる。 (J-1 型)
- b. だれもがこのパンを簡単に切ることができる。
- (33) a. この人形は簡単に動く。 (J-2 型)
- b. だれもがこの人形を簡単に動かすことができる。

J-1 型と J-2 型の中間構文が可能文と同義であるのは、J-1 型と J-2 型の動詞が現在進行中の動作ではなく、時制の制約から解除され非現実相の可能性を表わすからである。主語「扉」と「パン」は意志性をもたないので、それらの属性は含意されている不特定多数の動作主の関与によってのみ表わされる。中間動詞は当然その主語の属性に関する情報をもっているわけであるが、それだけでは十分ではない。この情報の不足を補うのが可能文である。したがって、可能の要素は中間構文ではいつも必要な要素となる。中間構文のこの特徴により、構文上、中間構文を可能文から区別する根拠となる。

4. 韓国語の中間構文 (K-1 型と K-2 型) の文法的特徴

この節では、韓国語の中間構文は日本語の中間構文と同様の文法的特徴をもたないことを論じる。以下の節では、この点を十分念頭において考察を進めていくことにする。

4.1 総称性 (Genericity)

韓国語の中間構文の総称性は文法的に保証されない。それでは、このことを支持するいくつかの事実をみてみよう。第一に、韓国語の中間構文では、意味上動作主が含意されるだけではなく、統語上にも動作主が実現される。そのうえ、不特定多数の動作主ではなく、特定の動作主を独立した項として立てることができる(後述)。このことは、韓国語の中間構文の主語の属性は、不特定多数の動作主だけではなく、特定の動作主の行為によっても表される、といった動的可能性を含んでいることを意味する。

第二は、韓国語の中間動詞は非状態相 (non-stative aspect) の解釈を受ける、ということである。4.3 節でみるように、韓国語の中間動詞は一定の不変化より、特定の時点の過程や動作を問題にする。このことは韓国語の中間動詞は非状態的であることを意味する。

第三は、われわれは 3.1 節で日本語の中間構文の主語が「は」に表示されるのは、主語の総称的特性を記述することの帰結であり、それゆえ複数の属性の中から個別的属性を静的実体として捉えることを述べた。これに対して、以下では韓国語の中間構文の主語は、個別的属性を必ずしも静的実体として捉えるとは限らないことを述べる。

韓国語では日本語の「は／が」に対応する形式として *nun / ka* と *un / i* がある。*nun / ka* は母音で終わる名詞句の後置詞で、*un / i* は子音で終わる名詞句の後置詞で現われる。本稿ではこれらの代表型として *nun / ka* を使うことにする。次の例文をみてみよう。

- (34) I chayk-i-un cal ilk-hi-n-ta.
 この 本-NOM/-TOP 簡単に 読む-MID-NPST-DSE
 ‘この本はよく読める’

(34) の韓国語の中間構文では *nun / ka* の両方を使える。日本語の中間構文の主語が「は」と結びつくのとは対照的である。Choi (1993: 57) によれば、「後置詞 *nun* は一般的な範疇や情報を表わす反面、*ka* は具体的な範疇や情報を表わす」とされている。

- (35) a. Hankwuk-un san-i manh-ta.
 韓国-TOP 山-NOM 多い-DSE
 ‘韓国は山が多い’
 b. Ilpon-un onchen-i manh-ta.
 日本-TOP 温泉-NOM 多い-DSE
 ‘日本は温泉が多い’

ここで中間構文の主語が具体的範疇を示していることに注目しよう。例えば、次のように定主語である (36) の I chayk (この本) は不定の主語である chayk (本) という一般的範疇のなかの具体的範疇を示す。次の例文をみてみよう。

- (36) a. Chayk-un i chayk-i cal ilk-hi-n-ta.
 本-TOP この 本-NOM 簡単に 読む-MID-NPST-DSE
 ‘本はこの本がよく読める’
- b. *Chayk-i i chayk-un cal ilk-hi-n-ta.
 本-NOM この 本-TOP 簡単に 読む-MID-NPST-DSE
 ‘本がこの本はよく読める’

(36b) の文が成立しないことから nun によって示される名詞句のほうが一般的範疇を示すことがわかる。Choi (1993: 59) によれば、一般的範疇を示す名詞句 (A) は「静的」な範疇に属し、具体的範疇を示す名詞句 (X) は「動的」範疇に属するとされる。これに X の属性 (Y) を加えると、一般的範疇を示す主語と具体的範疇を示す主語、そしてその属性との関係は次のように書き表わすことができる。

- (37) a. 一般的範疇 (A): 具体的範疇 (X) = 静的: 動的
 b. 具体的範疇 (X): 属性 (Y) = 静的: 動的

(36b) にみるように、具体的範疇を示す中間構文の主語は nun によって表わせないことから、nun と ka を、「静的: 動的」という対立的な概念として捉えることができる。もし、これが正しいとすると、ka は主語の属性を動的に、nun は静的に捉えられる、ということになる。すなわち、nun は主語の属性を静的 (総称的) に結び付けるのに直結し、ka は動的 (非総称的) に結び付けるのに直結する、という帰結が得られる。韓国語の中間構文の主語は、両方の後置詞との結合を許すことから、必ずしも主語が総称的解釈を受けるとは限らない、ということが予想される。これに対して、日本語の中間構文でいずれも「は」のみが適格であることは、複数の属性の中から個別的属性を静的実体として捉えようとすることに起因するためであると考えられる。

4.2 含意動作主 (Implicit Agent)

3.2 節で述べたように、日本語の中間構文では対応する他動詞文の目的語のみが統語上主語として実現され、動作主は義務的に抑制されなければならないが、その存在は含意される。まず、韓国語の K-1 型をみてみよう。

- (38) a. John-i cong-ul cal wulli-n-ta. (他動詞文)
 -NOM 鐘-ACC 簡単に 鳴らす-NPST-DSE
 ‘太郎が鐘を簡単に鳴らす’

- b. I cong-i/-un cal wulli-n-ta. (中間構文)

この 鐘-NOM/-TOP 簡単に 鳴る-MID-NPST-DSE

‘この鐘は簡単に鳴る’

- (39) a. Taro-ka thulek-ul cal wumciki-n-ta. (他動詞文)

-NOM トラック-ACC 難無く 動かす-NPST-DSE

‘太郎がトラックを難無く動かす’

- b. I thulek-i/-un cal wumciki-n-ta. (中間構文)

この トラック-NOM/-TOP 苦もなく 動く-NPST-DSE

‘このトラックは苦もなく動く’

中間動詞は対応する他動詞から派生され目的語項が主語となるため自動詞である。(38b)と(39b)の中間動詞は動詞形態の変化なしで他動詞から派生されたものである。次に K-2 型をみてみよう。

- (40) a. Hanako-ka chayk-ul ilk-nun-ta. (他動詞文)

-NOM 本-ACC 読む-NPST-DSE

‘花子が本を読む’

- b. I chayk-i/-un cal ilk-hi-n-ta. (中間構文)

この 本-NOM/-TOP 簡単に 読む-MID-NPST-DSE

‘この本は簡単に読める’

- (41) a. Ciro-ka yenpil-ul kkakk-nun-ta. (他動詞文)

-NOM 鉛筆-ACC 削る-NPST-DSE

‘次郎が鉛筆を削る’

- b. I yenpil-i/-un cal kkakk-i-n-ta. (中間構文)

この 鉛筆-NOM/-TOP 簡単に 削る-MID-NPST-DSE

‘この鉛筆は削りやすい’

(40a) と (41a) は主語と目的語をもつ他動詞文であるのに対して, (40b) と (41b) の ilk-hi, kkakk-i などは ilk-, kkakk- などの他動詞から派生され, 対応する他動詞文の目的語が主語となっている。それでは, K-1 型と K-2 型にも意味上に動作主が含意されるかみてみよう。

まず第一に, 韓国語の中間構文を日本語の中間構文のように, 不特定多数の動作主 Nwukwunaka (だれもが) を主語にした可能文に書き直してみよう。

- (42) a. Nwukwuna-ka i cong-ul cal wulli-lswuiss-ta. (K-1 型)

だれも-NOM この 鐘-ACC 簡単に 鳴らす-POT-DSE

‘だれもがこの鐘を簡単に鳴らすことができる’

- b. Nwukwuna-ka i thulek-ul cal wumciki-lswuiss-ta.
だれも-NOM このトラック-ACC 簡単に 動かす-POT-DSE
‘だれもがこのトラックを簡単に動かすことができる’

- (43) a. Nwukwuna-ka i chayk-ul cal ilk-ulswuiss-ta. (K-2 型)
だれも-NOM この本-ACC 簡単に 読む-POT-DSE
‘だれもがこの本を簡単に読むことができる’
b. Nwukwuna-ka i yenphil-ul cal kkakk-ulswuiss-ta.
だれも-NOM この鉛筆-ACC 簡単に 削る-POT-DSE
‘だれもがこの鉛筆を簡単に削ることができる’

(42) と (43) にみるように、韓国語の中間構文でも中間動詞の内容が nwukwunaka に当てはまることから意味上動作主の存在が含意されていることがわかる。

第二に、中間構文に含意される動作主は、中間動詞と自動性を表わす副詞との共起可否を検討することによりその存在を確認できる。韓国語には自動性を表わす副詞 cecello 「ひとりでに」がある。この副詞が中間動詞と共起しなければ、そこには動作主が含意されていることになる。

- (44) I cong-i/-un cecello wulli-n-ta. (K-1 型)
この 鐘-NOM/-TOP ひとりでに 鳴る-NPST-DSE
‘この鐘はひとりでに鳴る’

K-1 型は自動性を表わす副詞との共起を許すために、含意動作主の存在は明確ではない。これに対して、K-2 型は自動性の副詞と共起しない。

- (45) *I yenphil-i/-un cecello kkakk-i-n-ta. (K-2 型)
この 鉛筆-NOM/-TOP ひとりでに 削る-MID-NPST-DSE
‘この鉛筆はひとりでに削れる’

第三に、韓国語の中間構文が日本語の中間構文と同様の統語の特徴をもつとすると、統語上に動作主が生じてはならない。しかし、韓国語の中間構文は eyuyhayse (によって) という後置詞を使うことにより、特定の動作主を統語上に実現させることができる⁽⁵⁾。

- (46) a. I cong-i/-un John-eyuyhayse cal wulli-n-ta. (K-1 型)
この 鐘-NOM/-TOP -によって 簡単に 鳴る-NPST-DSE
‘この鐘はジョンによって簡単に鳴る’

- b. I thulek-i/-un Tom-eyuyhayse cal wumciki-n-ta.
 この トラック-NOM/-TOP -によって 簡単に 動く-NPST-DSE
 ‘このトラックはトムによって簡単に動く’

- (47) a. I chayk-i/-un Hanako-eyuyhayse cacwu ilk-hi-n-ta. (K-2 型)
 この 本-NOM/-TOP -によって よく 読む-MID-NPST-DSE
 ‘この本は花子によってよく読める’

- b. I yenphil-i/-un Ciro-eyuyhayse cal kkakk-i-n-ta.
 この 鉛筆-NOM/-TOP -によって 簡単に 削る-MID-NPST-DSE
 ‘この鉛筆は次郎によって簡単に削れる’

(46) と (47) にみるように K-1 型と K-2 型には、特定の動作主を統語上に実現させることができる。この理由は K-1 型の動詞と K-2 型の動詞の内部に挿入される -i-, -hi-, -li-, -ki- などの接辞に主語 (動作主) に付与されるべき格と目的語 (被動作主) に付与されるべき格が共に動詞及びその接辞に付与されるからである。このことは、韓国語の K-1 型の動詞と K-2 型の中間形態素では動作主の存在が受動形態素と同様に統語上可視的だからである。もしこれが正しいとすると受動文と同様、動作主指向の副詞や目的節などと共起可能であると予測される。これらについては 4.3 節で議論する。

4.3 状態性 (Stativity)

韓国語の中間構文の主語は総称的解釈を受けないので、特定の時点の過程や動作を記述する表現に生ずることができる。このことは韓国語の中間動詞は一定の不変変化の代わりに、特定の時点の一時的変化をも問題にする、ということの意味する⁽⁶⁾。ここで、韓国語の中間動詞が非状态的、つまり、出来事を記述することを示すいくつかの事実を検討してみよう。

まず、最初に K-1 型と K-2 型が過去形及び命令形に生ずる例を挙げてみる。

- (48) I cong-i/-un ecey cacwu wulli-ess-ta. (K-1 型 + 過去形)
 この 鐘-NOM/-TOP きのう よく 鳴る-PAST-DSE
 ‘この鐘はきのうよく鳴った’

- (49) I chayk-i/-un caknyen-ey cacwu ilk-hi-ess-ta. (K-2 型 + 過去形)
 この 本-NOM/-TOP 去年-に 頻繁に 読む-MID-PAST-DSE
 ‘この本は去年よく読めた’

- (50) Cal wumciki-ela, thulek-a. (K-1 型 + 命令形)
 簡単に 動く-IMP トラック-EXC
 ‘簡単に動けよ、トラックよ’

- (51) Swuipkey ilk-hi-ela, chayk-a. (K-2 型 + 命令形)

苦もなく 読む-MID-IMP 本-EXC

‘よく読めろよ, 本よ’

(48) - (51) の K-1 型と K-2 型は過去形と命令形に生じる. このことは韓国語の中間動詞は状態相の解釈を受けないことを意味する.

韓国語の中間動詞が状態相の解釈を受けないもう一つの証拠は, 進行相を表わす -koiss (ている) との共起可否をみることによって立証できる.

- (52) I cong-i/-un cal wulli-koiss-ta. (K-1 型 + 進行相)

この 鐘-NOM/-TOP 簡単に 鳴る-PGS-DSE

‘この鐘は簡単に鳴っている’

- (53) I chayk-i/-un manhi ilk-hi-koiss-ta. (K-2 型 + 進行相)

この 本-NOM/-TOP よく 読む-MID-PGS-DSE

‘この本はよく読めている’

K-1 型と K-2 型は日本語の中間動詞とは異なって進行相と共起する. このことは韓国語の中間動詞が非状態動詞 (non-stative verbs) であることを意味する.

さらに, 韓国語の中間動詞は非状態動詞であるために, 動作主指向の副詞, 疑似分裂文, 反復的単純現在時制, 目的節にも生じる. これらの事実はすべて非状態動詞に特徴的なことである.

- (54) I inhyeng-i/-un yelsimhi wumciki-n-ta. (動作主指向の副詞 + K-1 型)

この 人形-NOM/-TOP 一生懸命 動く-NPST-DSE

‘この人形は一生懸命に動く’

- (55) I chayk-i/-un yelsimhi phal-li-n-ta. (動作主指向の副詞 + K-2 型)

この 本-NOM/-TOP 一生懸命に 売る-MID-NPST-DSE

‘この本は一生懸命に売れる’

- (56) I cong-i/-un ha-nun il-un cacwu wulli-nun-kes-ita. (疑似分裂文 + K-1 型)

この 鐘-NOM/-TOP する-NPST こと-TOP よく 鳴る-NPST-こと-DSE

‘この鐘がすることはよく鳴ることである’

- (57) I chayk-i/-un ha-nun il-un swuipkey ilk-hi-nun-kes-ita. (疑似分裂文 + K-2 型)

この 本-NOM/-TOP する-NPST こと-TOP 容易に 読む-MID-NPST-こと-DSE

‘この本がすることは簡単に読めることである’

(58) I cong-i/-un mayil 12 si-ey cacwu wulli-n-ta. (反復的単純現在時制 + K-1 型)
 この 鐘-NOM/-TOP 毎日 12 時-に よく 鳴る-NPST-DSE
 ‘この鐘は毎日十二時によく鳴る’

(59) I chayk-i/-un mayilachim-ey cacwu ilk-hi-n-ta. (反復的単純現在時制 + K-2 型)
 この 本-NOM/-TOP 毎朝-に 頻繁に 読む-MID-NPST-DSE
 ‘本は毎朝よく読める’

(60) [Cim-ul nalu-ki wihayse] i thulek-i/-un cacwu wumciki-n-ta. (目的節 + K-1 型)
 荷物-ACC 運ぶ-NOM ために この トラック-NOM/-TOP よく 動く-NPST-DSE
 ‘[荷物を運ぶために] このトラックはよく動く’

(61) [Cisik-ul ssah-ki wihayse] i chayk-i/-un cal ilk-hi-n-ta. (目的節 + K-2 型)
 知識-ACC 積む-NOM ために この 本-NOM / TOP よく 読む-MID-NPST-DSE
 ‘[知識を蓄積するために] この本は簡単に読める’

(54) – (61) の事実は K-1 型と K-2 型の内部に添加される -i-, -hi-, -li-, -ki- などの接辞は、それ自体が項であり、主語の意味役割(動作主)と目的語(被動作主)がともにこの項に付与されることを示す。このことから韓国語の中間動詞では動作主の意味役割が可視的であり、統語上受動文であるとの帰結が得られる。したがって、韓国語の中間構文は非状態性の構文である。

しかし、韓国語の中間構文の主語の属性描写的性格にも注目せねばならない。次の例文をみよう。

- (62) a. Taro-ka thulek-ul cal wumciki-n-ta.
 -NOM トラック-ACC よく 動かす-NPST-DSE
 ‘太郎がトラックをよく動かす’
 b. I thulek-un cal wumciki-n-ta.
 この トラック-TOP よく 動く-NPST-DSE
 ‘このトラックはよく動く’

cal (よく) は様態の副詞としても、難易の副詞としても用いられるが、(62a) では、動作主(太郎)の運転能力を修飾し、(62b) では主語の属性(容易さ)を修飾している。このことから、韓国語の中間動詞では動作主の意味役割が意識されず、統語上自動詞であるとの帰結も得られる。韓国語の中間構文のこれらの特徴があるため、構文上、受動文から区別しなければならない。

4.4 様相 (Modality)

中村 (1995: 86) は、「英語の中間構文で可能を表わす法助動詞の要素が通例義務的に必要とされるのは、動詞がその主語に内在的である属性を記述していることから、その動詞が表わす

意味内容は前提となっているため、伝達するのに十分な情報を担っていない」と述べている。すなわち、中間動詞の表わす意味内容を十分に伝えるためには、可能などの意味を補わなければならない。Fagan (1988: 196) は次の (63a) の英語の中間構文は不特定多数の動作主を主語にした (63b) の文に書き直すことができると述べる。

- (63) a. This book reads easily.
b. People, in general, can read this book easily.

このことは英語の中間構文が可能文と同義 (synonymous) であることを意味する。この事実は日本語の中間構文にも当てはまる。もし韓国語の中間構文が日本語と英語の中間構文と同じ特徴をもつとすると、可能文と同義という関係が成立しなければならない。「同義」ということはある文とある文が相互的含意 (mutual entailment) を形成することを意味する⁽⁷⁾。

- (64) a. I cong-un cal wulli-n-ta. (K-1 型)
 この 鐘-TOP 簡単に 鳴る-NPST-DSE
 ‘この鐘は簡単に鳴る’
 b. Nwukwuna-ka i cong-ul cal wulli-lswuiss-ta.
 だれも-NOM この 鐘-ACC 簡単に 鳴らす-POT-DSE
 ‘だれもがこの鐘を簡単に鳴らすことができる’
- (65) a. I chayk-un cal ilk-hi-n-ta. (K-2 型)
 この 本-TOP 簡単に 読む-MID-NPST-DSE
 ‘この本は簡単に読める’
 b. Nwukwuna-ka i chayk-ul cal ilk-ulswuiss-ta.
 だれも-NOM この 本-ACC 簡単に 読む-POT-DSE
 ‘だれもがこの本を簡単に読むことができる’

相互的含意が成立するときは、例えば (64a) と (65a) でいえば、I cong-i/-un cal wulli-n-ta (この鐘はよく鳴る) と I chayk-i/-un cal ilk-hi-n-ta (この本はよく読める) が真であるならば、(64b) と (65b) の Nwukwuna-ka i cong-ul cal wulli-lswuiss-ta (だれもがこの鐘を簡単に鳴らすことができる) と Nwukwuna-ka i chayk-ul cal ilk-ulswuiss-ta (だれもがこの本を簡単に読むことができる) は真でなければならない。そしてその逆も真でなければならない。しかし、韓国語ではその逆は真ではない。この理由は K-1 型と K-2 型が受動文と同様の説明が可能だからである。K-1 型と K-2 型は受動文と同様の解釈が可能であるために、「現実相」の特徴をもつのに対し、可能文は変化の相を失っているために、「非現実相」の特徴をもつ。つまり、現実相は非現実相の可能性を前提とできるが、非現実相は現実相の可能性を前提とできない。したがって、現実相の特徴をもつ韓国語の中間構文は、非現実相の特徴をもつ可能文と相互的含意を形成しない。

4.5 日本語の中間構文との違い

いままで中間構文にかかわる諸文法特徴をもとに日本語の中間構文 (J-1 型と J-2 型) と、韓国語の K-1 型と K-2 型の中間構文の統語法を比較した結果、日本語の中間構文は状態化の操作を受けるが、韓国語の中間構文はその操作が許されないことがわかった。

まず、最初に、日本語の中間構文の主語は「は」に表示されるが、このことは日本語の中間構文が主語の複数の属性のなかから個別的属性を静的実体として捉えるからである。これに対して、K-1 型と K-2 型の主語は *nun / ka* の両方の後置詞との結合を許すことから、主語の個別的属性を動的に捉えることもできる。

二つめに、日本語の中間構文には不特定多数を主語にした可能文に書き直すことができること、自動性の副詞との共起が不可能であることから、意味上動作主が含意されるが、統語上(「によって」)実現することはない。これに対して、K-1 型と K-2 型の中間動詞には意味上動作主が含意されるだけでなく、統語上に実現することによりその存在が可視的 (visible) である。

三つめに、日本語の中間動詞は状態的 (stative) であるのに対し、K-1 型と K-2 型の中間動詞は非状態的 (non-stative) である。このことは日本語の中間動詞は進行相 (progressive)、動作主指向 (agent-oriented) の副詞、疑似分裂文 (pseudoclefts)、目的節 (rationale clauses)、単純反復現在時制 (iterative simple present) などに生じないが、韓国語の中間動詞はこれらの要素との共起を許すことから立証できる。

最後に、日本語の中間動詞には可能の意味が含まれているために、可能動詞と同義 (synonymous) であるが、韓国語の中間動詞は可能動詞との相互的含意 (mutual entailment) をもたないことから、同義ではないことがわかった。

このように韓国語の中間構文は日本語の中間構文のもつ諸文法的特徴に違反することから、韓国語において中間構文ははたして存在するかという疑問が起こる。では、次節では韓国語の中間構文がもつ特徴について考えてみることにしよう。

5. 韓国語の中間構文の特徴

国広 (1970: 194) は、英語の中間動詞の意味は、主語と動詞の意味関係から生ずるとして、中間構文では対応する他動詞文の目的語であるものが主語の位置を占めることによって受動の意味が生じ、一方 (受動形態素を含まない) 名詞句-動詞句構造をもつので、行為者 (actor) - 行為 (action) の構造意味をもつと述べる。したがって、中間動詞の意味は受動とこの構造意味の重なったものということになると述べている。これにもとづくと、受動の意味をもちながら動詞は受動変形を受けないことから、韓国語でも自動詞である中間動詞が存在する可能性はある。

Cho (1993) は、韓国語の中間構文を一種の自動詞文としてみなすべきことを提案した。ここで重要なのは、この一種の自動詞文を文法上にどのように位置づければいいのかということである。

ある。興味あることは、4.2 節と 4.3 節でみたように、動作主の存在を示唆する動作主指向の副詞や目的節などが統語上に生ずるために、韓国語の中間構文は自動詞文であるはずの意味内容が無理やりに受動構文に押し込まれていることがわかった。例えば、I ppang-i/-un cal cal-li-n-ta 「このパンはよく切れる」は I ppang-i/-un wuli-tul-ey-uyhayse cal cal-li-n-ta 「このパンはわれわれによって簡単に切られる」のように動作主を統語上に明示して表現することもできる。この理由は、K-1 型と K-2 型の内部に添加される -i-, -hi-, -li-, -ki- などの接辞は、それ自体が項であり、主語の意味役割 (動作主) と目的語 (被動作主) がともにこの項に付与されるからである。すなわち、動作主を統語上に実現させることによって、その存在が可視的になり、受動文と同様の説明が可能となる。これに似た現象はロマンス語にもみられる。次のイタリア語の中間構文では (66a) のように目的語 (le mele) が主語の位置に生ずることも、(66b) のように目的語の位置に生ずることもあるが、いずれも (66c) に相当する構文である (Keyser and Roeper 1984: 406)。

- (66) a. Le mele si mangiano.
the apple itself eat
b. Si mangiano le mele.
c. (The apple *si* eats.)

イタリア語の中間構文では、接語 (clitic) *si* に動作主の意味役割と格がともに付与され、受動文の場合と同様の説明が可能であるとされる。このことは次のスペイン語の中間構文にもみられる。次の例文 (67) は Arce-Arenales *et al.* (1994) から引用した。

- (67) Juan se mato.
a. Juan got killed. (passive)
b. Juan killed himself. (middle)

Arce-Arenales *et al.* (1994: 5) は、スペイン語の中間形態素 *se* は、受動の用法ももつと述べている。すなわち例文 (67) では接語 *se* によって、(67a) と (67b) にみるように受動と中間という両義の解釈が許されるとされる。(67b) では、Juan は被動作主であるが、(67a) では、Juan は動作主であると同時に被動作主である。このことから、スペイン語でも中間構文と受動構文との関係が問題となることがわかる。さらに、スペイン語の中間動詞は、次のように、目的節、動作主指向の副詞とも共起する。次の例文は Roberts (1985: 192) から引用した。

- (68) a. Las manzanas se comen para adelgazar.
the apple se eat for to-get-slim
'The apples *se* eat to get slim'
b. Las manzanas se comen voluntariamente.
the apple se eat voluntarily

‘The apples *se* eat voluntarily’

このことは K-1 型と、K-2 型に挿入される接辞 *-i-*, *-hi-*, *-li-*, *-ki-* などのように、スペイン語の中間形態素 *se* でも動作主の存在が受動形態素と同様に統語上可視的であり、受動文と同様の説明が可能であることを示唆する。

ところが、韓国語の中間構文を受動構文とみなす場合、典型的な受動構文との関係はどうなるかが問題となる。もし、韓国語の中間構文を受動構文とみなすと、すべての受動構文は中間用法をもたなければならない。したがって、韓国語の中間構文を受動構文からひきだすためには、独自の文法特徴をもった構文として他の構文と区別する必要がある。次のスペイン語を考えてみよう。(69) のスペイン語の中間形態素 *se* は、自動詞 *cayo* の前におかれ、主語の被影響性を表わすことができる。この場合、主語の受ける動作は非意図的な動作となる。

(69) Juan *se* *cayo* del tercer piso.

fell from third floor

‘Juan fell from the third floor’ (Arce-Arenales *et al.* (1994: 5))

このことから、スペイン語の中間動詞は、受動構文と同様に、自動詞用法との関係も問題となることがわかる。これは K-1 型と、K-2 型の内部に挿入される接辞が自動詞形態素、受動形態素などに関連をもつのに類似している。すなわち、スペイン語では受動、自動詞、中間用法が *se* という同形の形態素によって決められ、自動詞文と原形的な受動構文との両特徴を共有する。Kemmer (1994: 225) はこの特徴をもつ構文を「中間受動構文 (middle passive)」と呼んでいる。Kemmer によれば、この構文は受動構文でありながら、動作主が随意的に明示されない点にその特徴があるとされる。中間受動構文は自動詞文と原形的な受動構文の状況タイプ間の予備的な区別をひきだすのに役に立つ。

このように、韓国語の中間構文はスペイン語の中間構文にみられる同様の文法特徴、すなわち意味統語的に受動構文と自動詞文の両方の特徴を共有しながら主語の属性を記述することから、中間受動構文とみるべきである。

6. まとめ

3 節で日本語の中間構文は主語についての一般的、総称的特徴を記述すること、外部動作主が含意されること、状態的であること、可能文の特別な場合であることを述べた。これに対して動詞の形態的基準にもとづいて二つのタイプ (K-1 型と K-2 型) に分けられる韓国語の中間構文はいずれも日本語の中間構文にみられる特徴をもたないと述べた。具体的にいえば、韓国語の中間構文は *nun / ka* の両方を使うことが可能であることから、主語の属性は個別的で動物的な属性を表わすことになり主語は必ずしも総称的解釈を受けないこと、統語上に動作主が実現すること、状態化の操作を受けないこと、可能文と相互的含意を形成しないことから、可

能文と同義ではないことである。これらのすべての事実は韓国語の中間構文の主語が総称的解釈を受けないことの帰結である。韓国語の中間構文は、イタリア語とスペイン語の中間構文のように、自動詞文と受動構文などと関連をもつことから、韓国語の中間構文は、厳密な意味で「中間受動構文」とみるべきである。これはかつて Cho (1993) が韓国語の中間構文を一種の自動詞文として扱ったのに対して、中間受動構文として統語・形態・意味特徴をあわせた全体が他の構文と区別可能な特徴をもつものとしてその文法的な位置を規定した点に意義をもつといえる。

注

- (1) 国広 (1994) によれば、真の意味で能動と受動の「中間」という意味で「中間態」を捉えるのであれば、「再帰中間態」がふさわしいと考えられている。
- (2) 韓国語の文法表示として次のような略語を用いた。ACC = accusative, DAT = dative, DSE = declarative sentence ending, EXC = exclamation, IMP = imperative, INS = instrumental, MID = middle, NOM = nominative, NPST = non-past, PASS = passive, PAST = past, PGS = progressive, PL = plural, POT = potential, TOP = topic.
- (3) Kuroda (1992: 14) によると、総称文 (generic sentence) にはさらに普遍的総称文 (universal-generic sentence) と個体的総称文 (individual-generic sentence) に下位分類されるという。すなわち不定の主語の属性を記述する文は普遍的総称文であり、定の主語の属性を記述する文は個体的総称文である。そして吉村 (1995: 300) によれば、中間構文の総称性は「誰でも一定の行為を対象に施せば、その対象においてあらかじめ予定されている一定の結果が、必然的に生じてくる」ことを表わすものとして定義される。
- (4) 動作主指向の副詞は動作主側の様態を言及する副詞である。典型的な例として「慎重に、意図的に、一生懸命に、熱心に、入念に」などの副詞が取り上げられる。
- (5) 韓国語には三つの後置詞 -eykey (に), -hanthey (に) そして -eyuyhayse (によって) があるが、K-1 型と K-2 型では eyuyhayse 以外の後置詞は使うことができない。
- (6) 総称文 (generic sentence) は一般に真と考えられるところの命題を表わすために無時制 (tenseless) であるだけでなく無時間 (timeless) である。
- (7) 相互的含意 (mutual entailment) とは、含意の根拠を現実の世界の知識に依存することなく、言語の意味だけによって、X という文の意味が Y という文の意味に、Y という文の意味が X という文の意味に帰結することを意味する。例えば、次の能動文と受動文は相互的含意が成立する。 a. 太郎が次郎を殴った。 b. 次郎は太郎に殴られた。 すなわち「太郎」が「次郎」を「殴った」ことが真であるならば、「次郎」が「太郎」に「殴られた」も真である。しかし次の文は相互的含意が成立しない。 c. 広志は僕をうかつにも突いた。 d. 僕は広志にうかつにも突かれた。 c. と d. の文が相互的な含意を形成する

ためには, $c \rightarrow d$ が真であるならば, $d \rightarrow c$ も真でなければならない。しかし, $d \rightarrow c$ は必ずしも真ではない。

参考文献

- Cho, Sungdai (1993) "On the Potential Middle Constructions in Korean," *Language Research* 29 (4), Seoul: Language Research Institute Seoul National University, 443–477.
- Choi, Soo-Young (1993) "A Paradigm for the Korean Topic / Subject Particles *-nun* and *-ka*: Mathematical Paradigm and Text Analysis," *Language Research* 29 (1), Seoul: Language Research Institute Seoul National University, 49–73.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics in Montague's PQR*, Dordrecht: Reidel.
- Fagan, Sarah (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181–203.
- 川崎 潔 (1971) 「国語の中相動詞」『独協大学教養諸学研究』5, 29–57.
- Kemmer, Suzanne E. (1988) *The Middle Voice: A Typological and Diachronic Study*, Ph. D. dissertation, Stanford University.
- Kemmer, Suzanne E. (1994) "Middle Voice, Transitivity, and the Elaboration of Events." in: Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.), *Voice: Form and Function [= Typological Studies in Language; 27]*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 179–230.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English." *Linguistic Inquiry* 15, 381–416.
- 金 敏洙 (1962) 『国語文法論研究』通文館, 韓国.
- Kim, Han Kon (1983) "Ilunpa *-i*-sayek phitong-uy hwayongloncek coken" [いわゆる *-i* 使役受動の語用論的条件], *Hankul* [ハングル] 80, 35–52.
- Kim, Sek Tuk (1979) "Kwukeyu phisatong" [国語の被使動], *Ene* [言語] 4 (2), 181–192.
- Kim, Sek Tuk (1987) "Sikimpep kwa ipumpep" [使役法と受動法], *Kwukesaynghwal* [国語生活] 8, 89–101. 国語研究所 (韓国).
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』三省堂.
- 国広哲弥 (1994) 「日本語の中間態」日本言語学会第 108 回大会口頭発表 (1994 年 6 月 12 日, 於横浜国立大学).
- Kuroda, S.-Y. (1992) "Judgment Forms and Sentence Forms," in: Joan Maling (ed.) *Studies in Natural Language and Linguistic Theory [= Japanese Syntax and Semantics; 27]*, Dordrecht / Boston / London: Kluwer Academic Publishers, 13–77.
- Arce-Arenales, Manuel, Melissa Axelrod and Barbara A. Fox (1994) "Active Voice and Middle Diathesis: A Cross-Linguistic Perspective," in Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.), *Voice:*

Form and Function [= *Typological Studies in Language*; 27], Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 1-21.

中右 実 (1991) 「中間態と自発態」『日本語学』10 (2), 34-42.

中村 捷 (1995) 「中間構文」『X' 意味論の研究』平成5年度・6年度科学研究費補助金 (一般研究 (C)) 研究成果報告書, 54-89.

朴 良圭 (1978) 「受動 kwa 使動」[受動と使役]『国語学』7, 47-70, 国語学会 (ソウル, 韓国).

Roberts, Ian (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Ph. D. dissertation, University of Southern Carolina.

Yeon, Jae-Hoon (1991) "The Korean Causative-Passive Correlation Revisited," *Language Research* 27 (2), 337-358.

吉村公宏 (1995) 『認知意味論の方法 —— 経験と動機の言語学 ——』人文書院.

(東北大学大学院 博士課程)